

3.長岡京跡右京第994次(7ANGKT-4地区)

・井ノ内遺跡発掘調査報告

1. はじめに

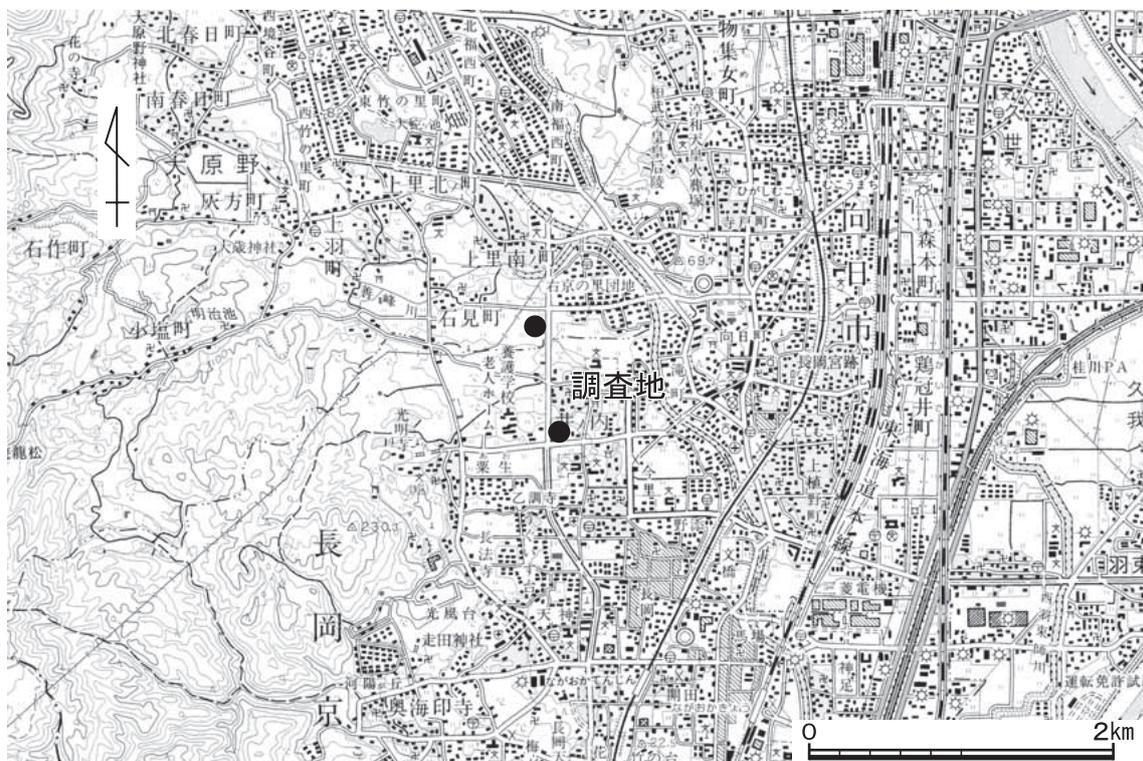
今回の調査は、平成22年度大山崎大枝線地方道路交付金業務委託に係る埋蔵文化財発掘調査に伴い、京都府建設交通部の依頼を受けて実施したものである。

調査地は、長岡京市井ノ内頭本・今里蓮ヶ糸に所在し、西山丘陵裾から東側に延びる標高40m前後の低位段丘上に位置する。調査範囲は長岡京の条坊推定復原によると、長岡京跡右京三条三坊十五町、同三条四坊二町、西三坊大路西側溝にあたり、縄文時代から中世までの複合遺跡である井ノ内遺跡の南西端部、一部、今里遺跡と重複する地点である。

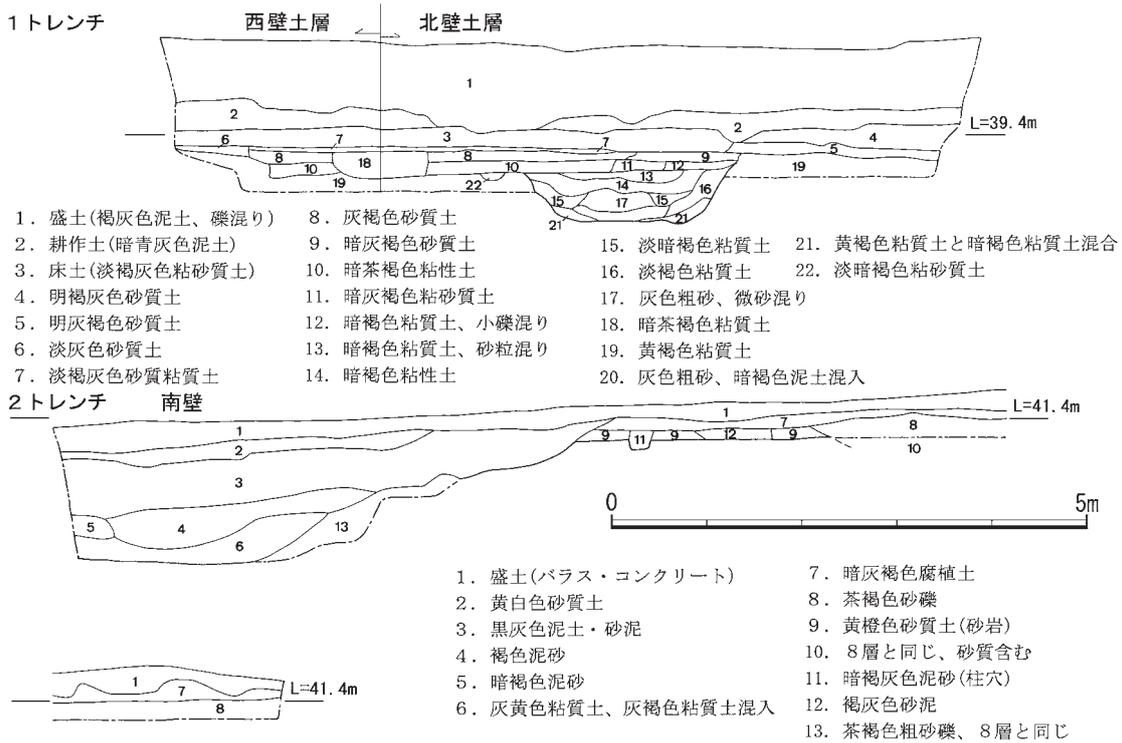
調査は、1～3トレンチの3か所を設定した。1トレンチは今里蓮ヶ糸地区、2・3トレンチは、井ノ内頭本地区にあたり、近隣住宅の生活進入路を確保するため、3回に分けて実施した。

調査の結果、西三坊大路の路面上に奈良時代あるいは平安時代の掘立柱建物跡、古墳時代の竪穴式住居跡、弥生時代の大溝等が検出された。

調査にあたっては、京都府教育委員会、長岡京市教育委員会、(財)長岡京市埋蔵文化財センター、地元自治会をはじめ多くの方々にご指導・ご協力をいただいた。記して、謝意を表します。なお、本報告は竹井が執筆した。



第1図 調査地位置図(国土地理院 1/50,000 京都西南部)



第2図 1・2トレンチ土層図

調査に係る経費は全額京都府建設交通部が負担した。報告に使用した座標系は日本測地系の第VI系である。

現地調査責任者 調査第2課長 肥後弘幸

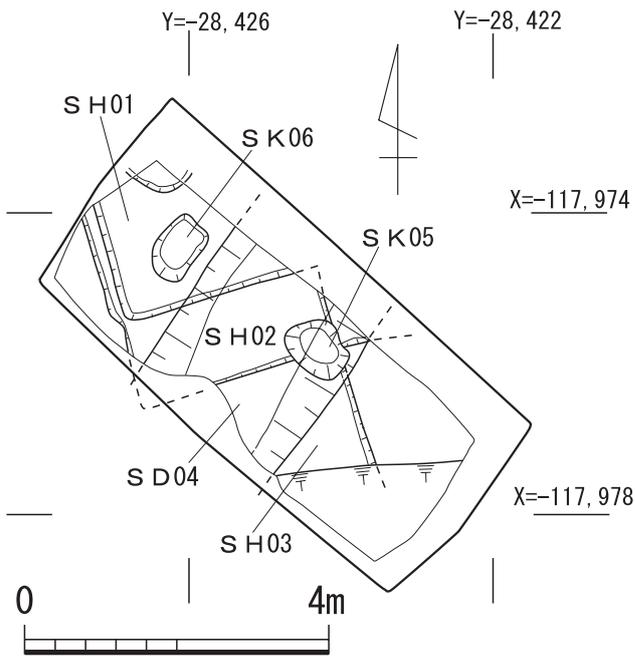
調査担当者 調査第2課主幹調査第3係長事務取扱 石井清司

同 専門調査員 竹井治雄

調査場所 長岡京市井ノ内頭本・今里蓮ヶ糸

現地調査期間 平成22年4月26日～8月27日

調査面積 472㎡



第3図 1トレンチ検出遺構平面図

2. 検出遺構

1) 1トレンチ(第2～5図、図版第1・2)
 2) 1トレンチは、主要地方道大山崎大枝線と通称光明寺道交差点の北東角の畑地に3.5×6mのトレンチを設定した。長岡京跡右京の推定西三坊大路東側溝の東宅地内に位置する。基本層序は地表下1.2mまで盛土、耕作土、床土(1～4層)が堆積し、

明灰褐色砂質土(5層)が中世の包含層である。この下面で竪穴式住居跡、大溝 S D04 を検出した。これらの遺構の基盤層は黄褐色粘質土(19層)である。

3棟の竪穴式住居跡は、調査地外に広がるため、平面規模は不明である。方形を呈し、深さ0.2m前後を測り、住居内から古墳時代後期に属する須恵器、土師器等の遺物が多数出土した。時期は概ね6世紀代に属する。

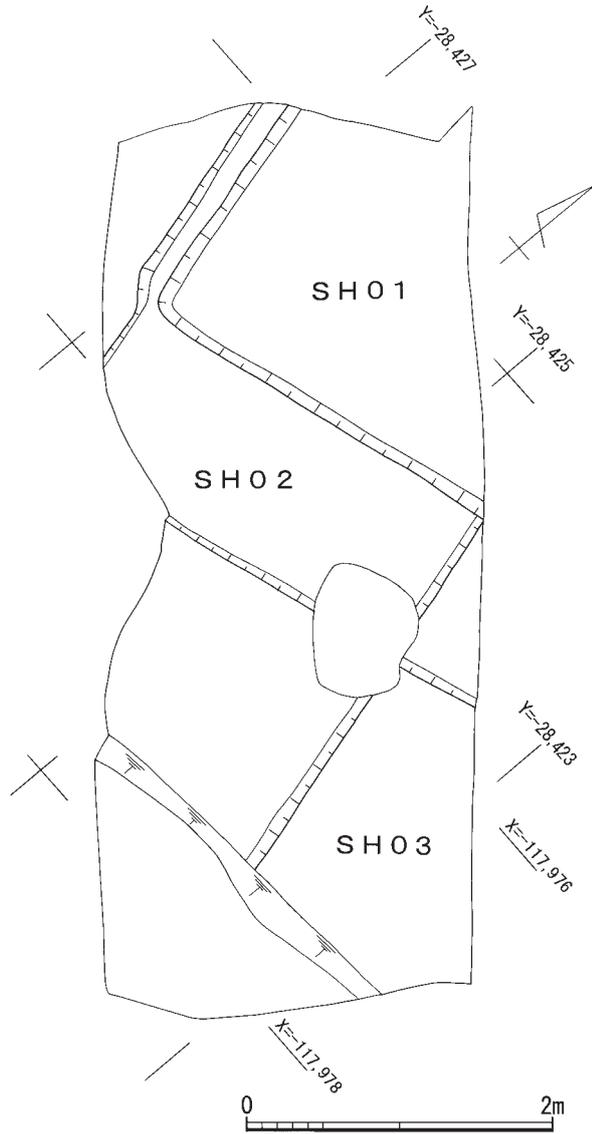
竪穴式住居跡 S H01 深さ25cm、一辺の長さは不明(方位N-25°-W)である。堆積土は、灰褐色砂質土(8層)で、炭化物、腐植土が混在する。出土遺物は須恵器杯身・蓋、土師器である。

竪穴式住居跡 S H02 深さ15cm、一辺の長さは不明(方位N-25°-W)である。堆積土は、暗茶褐色粘性土、暗灰褐色粘砂質土(10・11層)である。出土遺物は須恵器杯身、土師器高杯である。

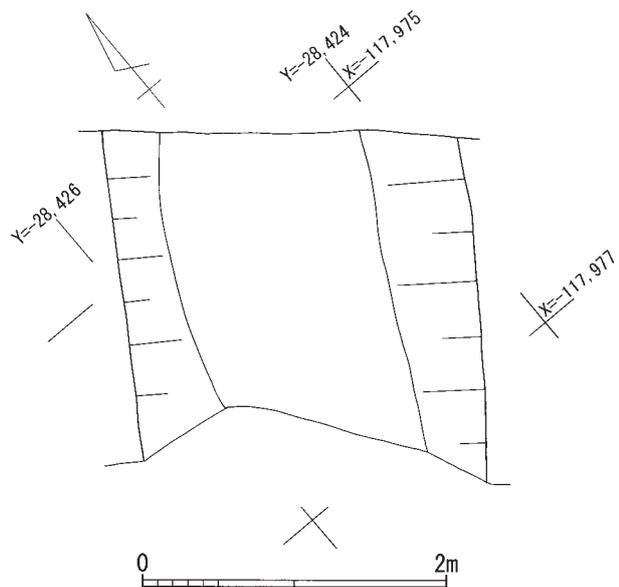
竪穴式住居跡 S H03 深さ20cm、一辺の長さは不明(方位N-25°-W)である。出土遺物は須恵器杯・甕、土師器高杯である。

大溝 S D04 トレンチ中央部、竪穴式住居跡の下層で検出したもので、方位はN-30°-Eの溝である。溝の上面幅が2.2m、深さは0.7mを測り、断面は逆台形を呈する。堆積土(12～17・21層)は、大きく3層に分かれる。上層(13～15層)は腐植土などが混じり、遺物はわずかである。人為的に埋まったものと思われる。中層(17層)は砂・粗砂であり、流水の痕跡が認められる。下層(16・21層)は淡褐色粘質土・黄褐色粘質土と暗褐色粘質土の混合層が堆積し、溝底からは弥生時代後期の高杯・甕等の破片が多数出土した。

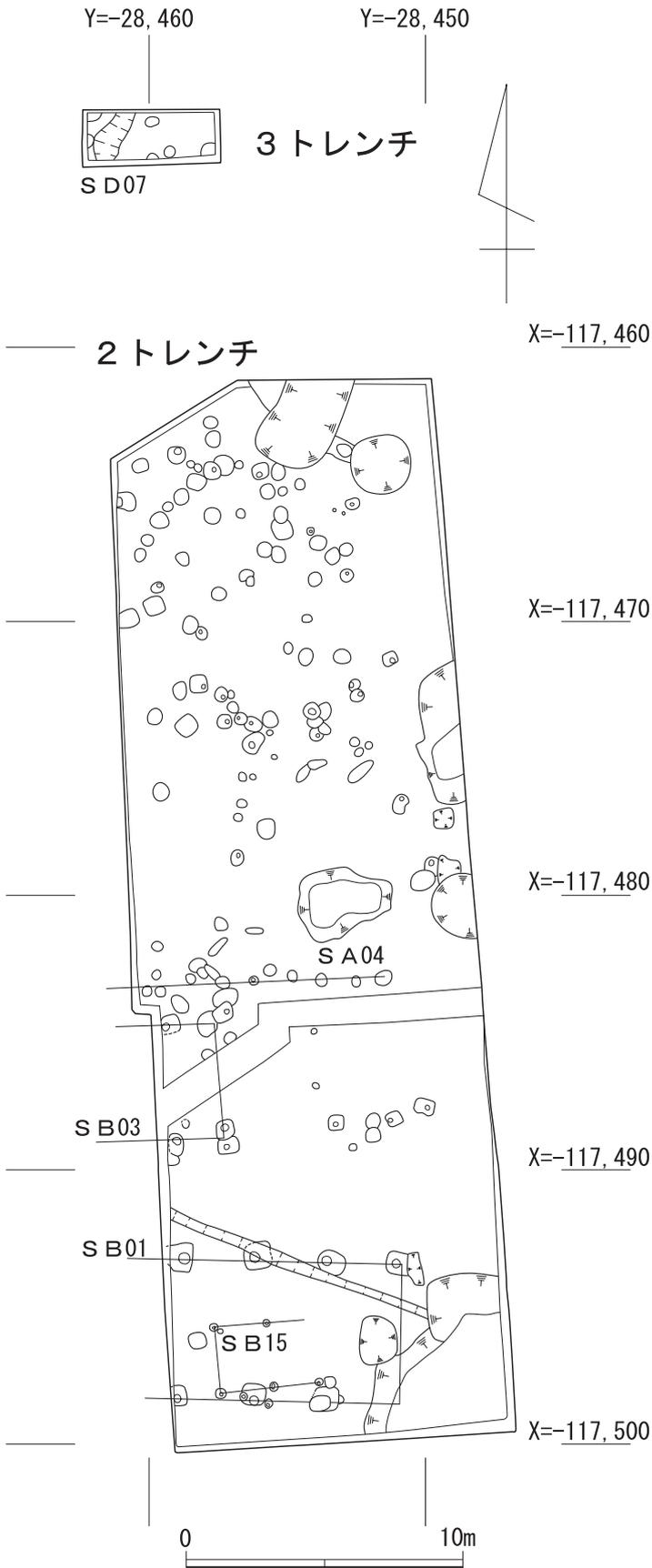
2) 2 トレンチ(第6・7図、図版第2～4)



第4図 1 トレンチ竪穴式住居跡 S H01～03 平面図



第5図 1 トレンチ大溝 S D04 平面図

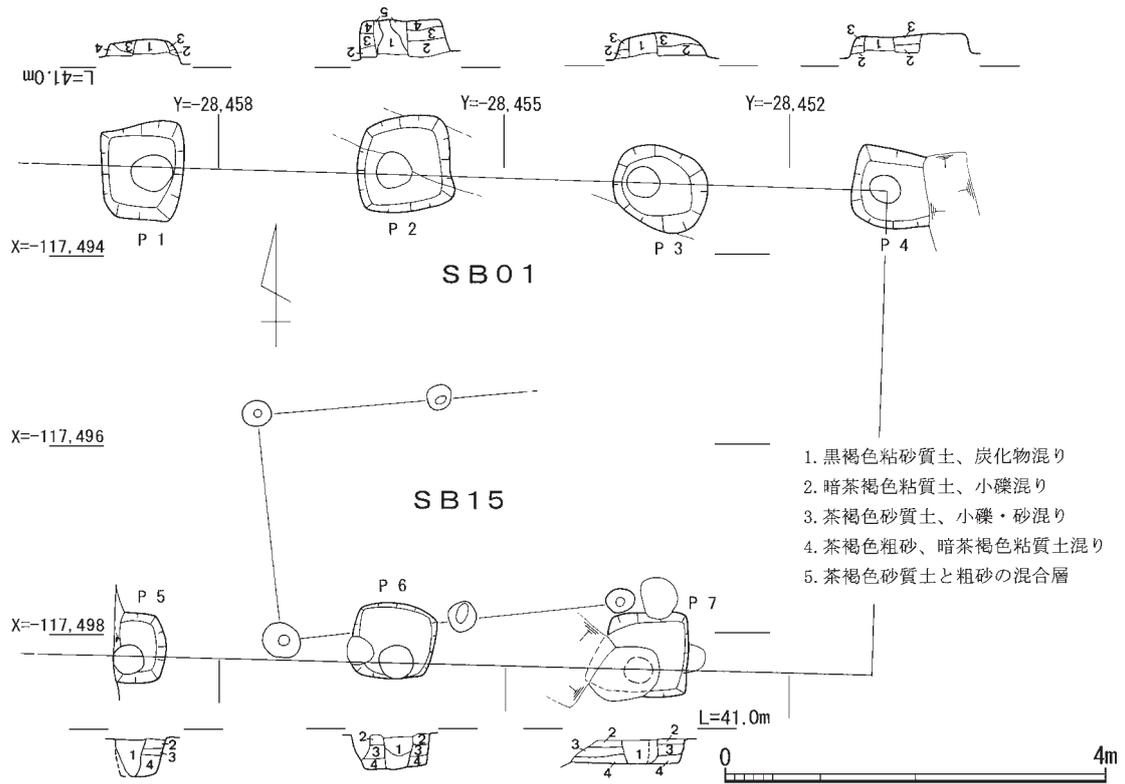


第6図 2・3トレンチ検出遺構平面図

調査トレンチの設定については、周辺住宅の生活進入路(出入り口)の確保、及び人力掘削による排土置き場等を考慮し、2回に分けて調査した。総面積は463㎡である。基本層序は地表下0.5mまで現代の造成による盛土(1～6層)が堆積する。暗灰褐色腐植土(7層)は中世の包含層で、この下層から掘立柱建物跡、溝等の遺構を検出した。これらの遺構の基盤層は8・9層であり、黄橙色砂質土(砂岩：9層)からはサヌカイト製の石器・石材が出土した。

X=-117,470 掘立柱建物跡 S B01 トレンチ南端部で検出した桁行3間以上、梁行2間あるいは1間の東西棟建物である。柱筋は真北方向から東(N-2°-E)に振れる。柱間寸法は2.6m(8.5尺)等間である。柱穴は方形を呈し、一辺0.8～1m、深さ0.3～0.5mを測る。柱痕は直径20cmの円形を呈する。遺物は、各柱穴から細片ではあるが平安時代前期の土師器・須恵器が出土した。

X=-117,480 掘立柱建物跡 S B03 S B01の北桁行柱列から北へ3.6mで検出した桁行1間以上、梁行2間の東西棟建物である。柱筋は真北方向から東(N-2°-E)に振れる。柱間寸法は桁行1.8m(6尺)等間で、梁行2.1m(7尺)等間である。柱穴は方形を呈し、一辺0.6～0.8m、深さ0.4～0.5mを測る。柱痕は直径15cmの円形を呈する。遺物は小片の土師器・須恵器がわずかに出土した。



第 7 図 2 トレンチ掘立柱建物跡 S B03・15 実測図

柵列 S A04 S B03の北側1.2mで検出した6間以上の東西方向の柵列である。S B01の北側10mに平行する。柱筋は真北方向から東(N- 2° -E)に振れる。柱間寸法は1.2m(4尺)等間、柱掘形は方形・円形で、一辺0.3～0.4mを測る。

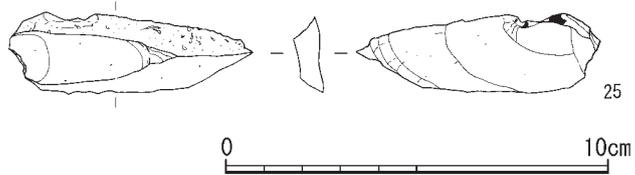
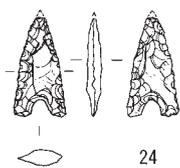
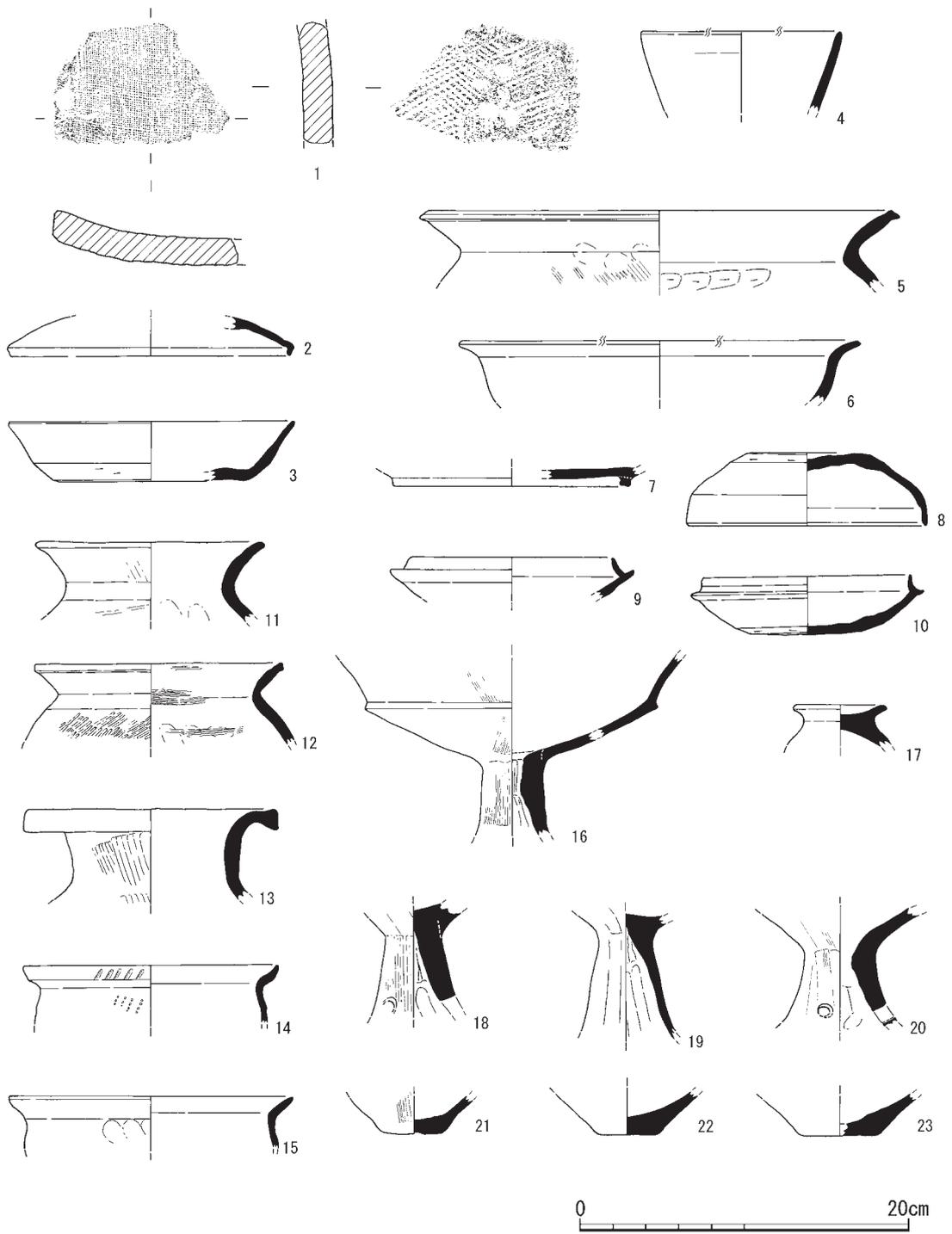
掘立柱建物跡 S B15 S B01の上層で検出した桁行2間以上、梁行1間の東西棟建物である。柱筋は真北方向から西(N- 5° -W)に振れる。柱間寸法は桁行1.8m(6尺)等間で、梁行2.4m(8尺)を測る。柱穴は円形を呈し、直径0.2～0.3m、深さ0.1～0.2mを測る。柱痕は直径5cmの円形を呈する。遺物は中世に属する土師器・瓦器の小片が出土した。

なお、トレンチ全体に中世及び古代の円形・方形を呈する柱穴が多数見つかっているが、建物跡として復原できない。

3) 3 トレンチ(第 6 図、図版第 5)

2 トレンチ北方約10mの地点に2×5mのトレンチを設定した。2 トレンチで確認できなかった西三坊大路西側溝を検出することを目的にした。基本層序は2 トレンチと同じ堆積状況である。

調査の結果、中世に属する柱穴・溝等を検出した。溝跡 S D07の規模は幅0.8～1m、深さ0.4m、断面「U」字形を呈する。遺物は中世の瓦器片のほか、奈良時代の土師器・須恵器の小片が出土した。また、当初の目的であった長岡京の西三坊大路西側溝等に関連する遺構・遺物は無かった。なお、遺構の基盤層である黄橙色砂質土(砂岩)からサヌカイト製の石器剥片が出土した。



第8図 出土遺物実測図

3. 出土遺物(第8図、図版第6)

今回の調査で出土した遺物は、整理箱(コンテナ)数にして11箱である。遺物の大半は土器類であるが、古瓦、石器なども出土した。

1・3・4は1トレンチ竪穴式住居跡S H02の上層から出土した奈良時代の遺物である。1は古瓦で、凸面には叩き目、凹面には布目がある。3は口径16.0cm、器高4.0cmを測る須恵器杯身である。底部は平底、体部は斜め上方に立ち上がり、端部は丸くおさまる。4は須恵器長頸壺の頸部である。

2は2トレンチS B01(P-2)から出土した口径16.0cm、須恵器蓋である。口縁端部が垂下して丸くおさまる。平安時代前期に属するものと思われる。

5～7は2・3トレンチの中世の包含層(暗灰褐色腐植土)から出土した。5は口径24.0cm、土師器甕である。6は口径20.0cm、土師器鉢である。7は高台を持つ須恵器杯身である。

8～10は1トレンチ竪穴式住居跡S H02から出土した須恵器である。8は口径16.0cm、器高3.0cmを測る杯蓋である。天上部はツマミが無く、平坦面を有する。口縁部はまっすぐ垂下し、短部は丸くおさまる。9・10は口径16.0cm、器高2.0cmを測る杯身である。口縁部は受け部から僅かに内傾しながら短く立ち上がり、端部は細く丸くおさまる。古墳時代後期に属するものである。

11～23は1トレンチ溝S D04から出土した弥生土器である。弥生時代後期に属する。11・12・14・15は甕で、口径は16.0～22cmを測る。体部外面は概ねタタキ痕が残る。口縁部は「く」の字形に外反し、口縁端部が丸くおさまるもの(11・15)、平坦面を持つもの(12)がある。14は口縁端部が垂直に立ち上がる「受け口」状口縁を呈する。13は広口壺で、口径16.0cmある。口縁部は水平に外反し、端部は平坦面を持つ。頸部外面にハケ目が残る。

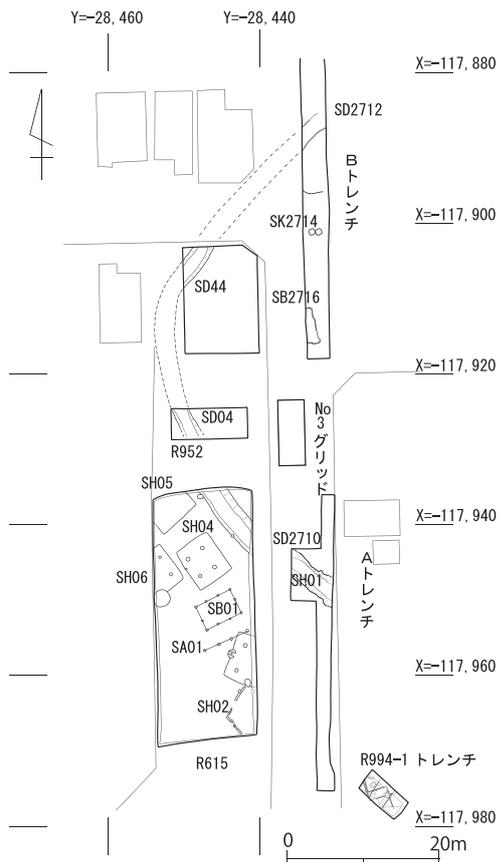
16・18～20は高杯および器台である。16は杯部で、下半は皿状を呈し、上半の口縁部は外反気味に斜め上方に立ち上がる。皿部と口縁部の外面の接線は稜線が見られる。18～20は脚部である。20は円形の孔があり、図で見る限り器台と思われるが、杯と脚部を接合する充填土が失われた高杯脚部の可能性もある。17は器台である。21～23は甕・壺の底部である。

24は2トレンチの黄橙色砂質土(砂岩)から出土したサヌカイト製の石鎌である。平面は二等辺三角形を呈し、側縁は丁寧に仕上げ、直線的であるが、先端部側はわずかに内湾する。基部は凹基式で、抉り部は半円形を呈する。先端部が少し欠損するが、長さ3.2cmを測る。25は3トレンチ黄橙色砂質土(砂岩)から出土したサヌカイト製の石器剥片である。

4. まとめ

大溝S D04は、周辺の調査(R615・R27・R615次調査)で見つかっている環濠集落の環濠と推定される溝と規模・形態・時期等において類似点が多いが、その方向がR615次調査のS D01と直交することから、一連の溝とは考えにくい。今後の調査に期待される。

竪穴式住居跡は複数回の建て替えが認められ、近隣のR615・R952次調査成果を合わせると、



第9図 1トレンチ周辺遺構配置図

古墳時代後期には大規模な集落が営まれたことが分か
ってきた。

掘立柱建物跡 S B01・03及び柵列 S A04は推定西三
坊大路の路面上で見ついている。また2トレンチの
南側15mに位置する R830次調査の井戸 S E172では瓦
の他、灰釉陶器などが出土しており、整然とした建物
配置や特色ある出土遺物の存在から、一般集落とは異
なる可能性がある。時期は長岡京廃絶後、平安時代初
期までの遺構群である。

なお、2・3トレンチでは、西三坊大路の西側溝が
推定される地点であるが、長岡京期の遺物すら皆無で
あり、その痕跡は確認できなかった。その理由として
は、今回の2・3トレンチにおいては後世の削平が大
いに影響したものと考えられるが、元もと側溝が施工
されなかった可能性も否定できない。

参考文献

竹井治雄「長岡京跡右京第615次発掘調査概要(7ANIHJ- 6地区)」(『京都府遺跡調査概報』第89冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999

網 伸也・百瀬正恒「長岡京右京二条四坊一町跡・上里遺跡 右京第772・775次」(『京都市埋蔵文化財発掘調査概報』2003-4 (財)京都市埋蔵文化財研究所) 2003

増田孝彦「長岡京跡右京第830次・井ノ内遺跡・上里遺跡発掘調査概要(7ANGKT- 2・GHD- 9地区)」(『京都府遺跡調査概報』第117冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2007

増田孝彦「長岡京跡右京第753次・井ノ内遺跡・上里遺跡発掘調査概要(7ANGHI- 5地区)」(『京都府遺跡調査概報』第107冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2003

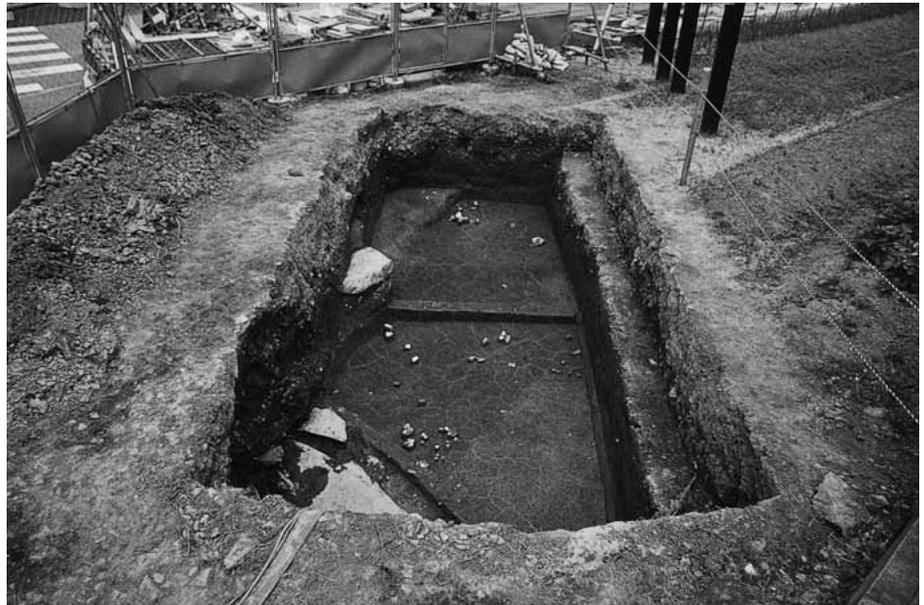
増田孝彦「長岡京跡右京第795次・井ノ内遺跡発掘調査概要(7ANGKS- 6地区)」(『京都府遺跡調査概報』第113冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2005

竹井治雄「長岡京跡右京第994次(7ANGKT- 4地区)・井ノ内遺跡発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第137冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2010

圖 版



(1) 2・3トレンチ調査前全景
(南から)



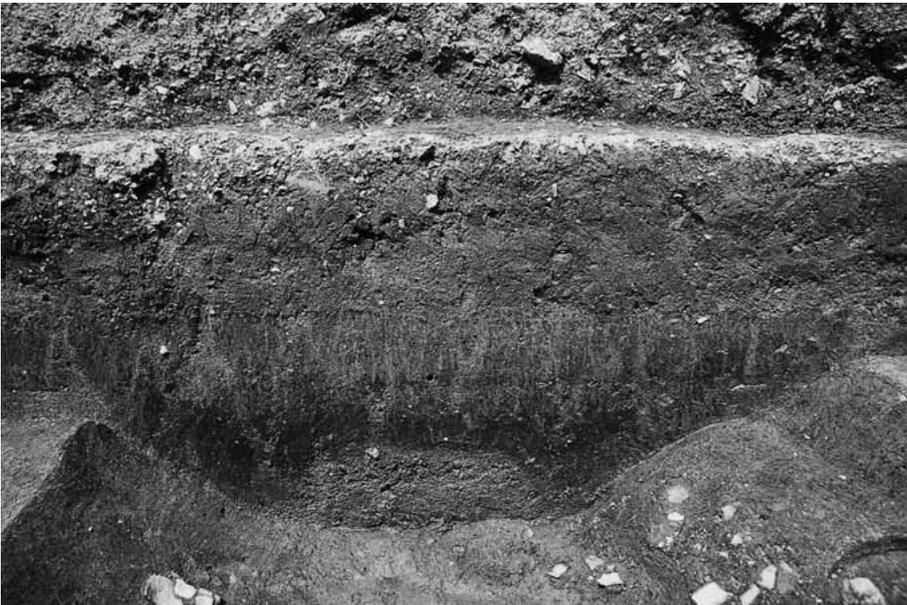
(2) 1トレンチ竪穴式住居跡
S H01・02検出状況(南東から)



(3) 1トレンチ竪穴式住居跡
S H02遺物出土状況(上が東)



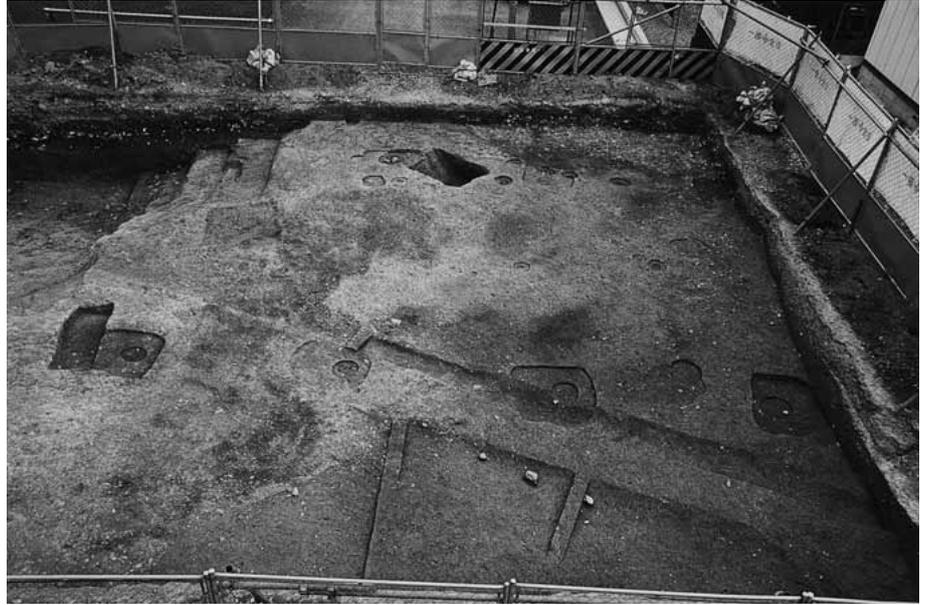
(1) 1 トレンチ溝 S D04 全景
(南東から)



(2) 1 トレンチ北壁内溝 S D04
土層堆積状況(南西から)



(3) 2 トレンチ南半部全景(北から)



(1) 2 トレンチ掘立柱建物跡
S B01 全景(北から)



(2) 2 トレンチ掘立柱建物跡
S B01-P 6 検出状況(東から)



(3) 2 トレンチ掘立柱建物跡
S B01-P 2 内土層堆積状況
(南東から)



(1) 2 トレンチ北半部全景(南から)



(2) 2 トレンチ掘立柱建物跡
S B03全景(南から)



(3) 2 トレンチ北半部柱穴群
検出状況(南から)



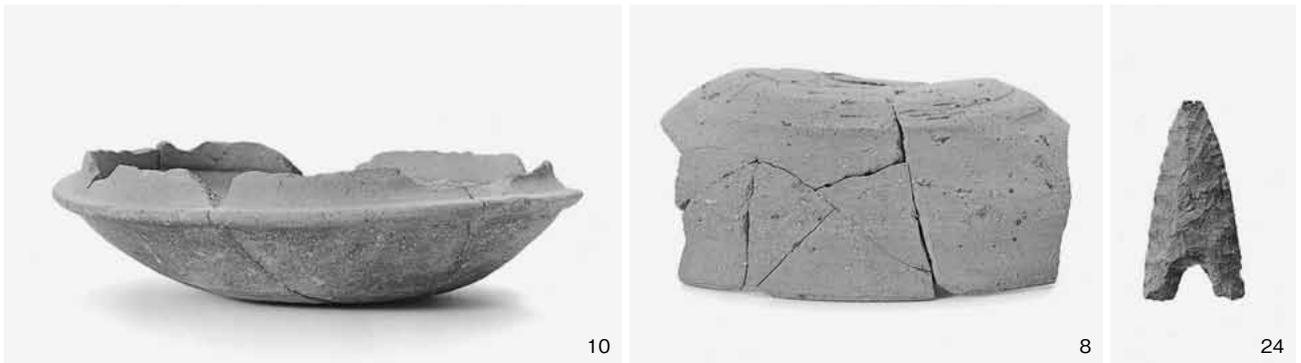
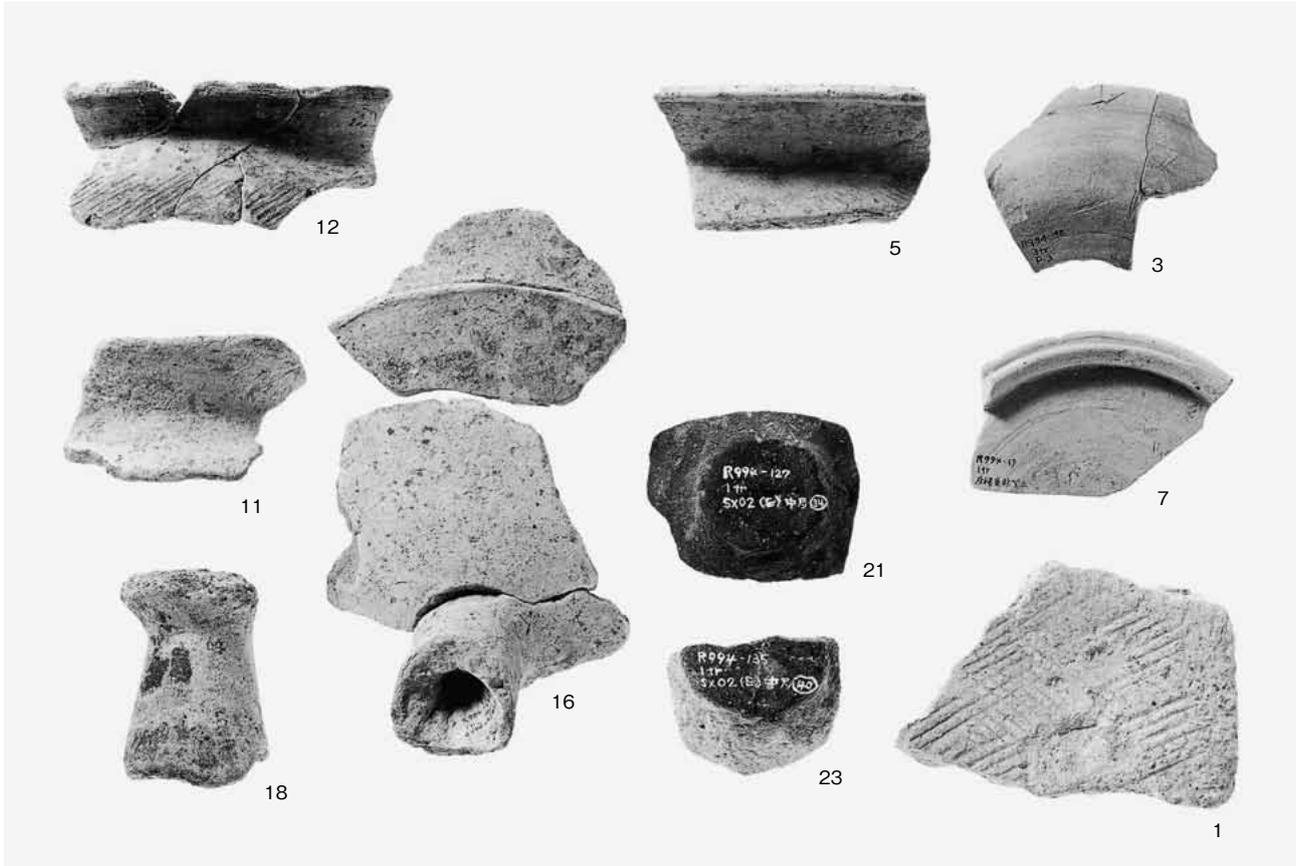
(1) 3 トレンチ全景(西から)



(2) 3 トレンチ溝 S D07 検出状況
(南西から)



(3) 3 トレンチ柱穴検出状況
(南から)



出土遺物